日野原 重明プロデュース　ベー・チェチョル演奏会とトークショー

音楽を通して　命の大切さと世界平和への願いを伝えたい

聖路加国際病院名誉院長としてがん患者のホスピスに取り組む103歳の日野原重明さんが、甲状腺がんで声を失い、奇跡的な手術によって再び声帯を取り戻した韓国出身のテノール歌手、ベー・チェチョルさんの復帰支援を行っている。ベーさんの歌に「心が震えた」という日野原さんは4月21日(火)、ザ・シンフォニーホールでベーさんの音楽会と、音楽プロデューサー・輪嶋東太郎氏を相手に自らのトークショーを開催。音楽の素晴らしさなどについて強いのある声でたっぷり語るとともに、次々と握手を求める観客にもニコニコと応じ、ベーさんが歌いだすと、立ち上がって両手を大きく振り上げ指揮を執った。まるで無邪気な少年のようだった。

この様子に感動したファンからの要望に応えて、8月4日(火)再び同ホールで、自らのプロデュースによるトークと音楽、さらに映画を加えたイベントをベーさんとともに開催する。日野原さんは「ぜひベーさんの歌を聴いてほしい。それが世界平和につながるのです」と命の炎を燃やす。

「人の喜ぶ姿が栄養です」と話す日野原重明さん。ベー・チェチョルさんと手をとり観客に応える

がん克服のベーさんとともに

――100歳を超えて、先生ほど元気で、毎日のように新幹線や飛行機に乗っている方はいらっしゃるのでしょうか

日野原　今年10月で104歳です。韓国に行ったり台湾に行ったりね。この夏にはニューヨークに行きます。次の目標通過点を東京五輪に設定しています(会場驚きに湧く)。

――先生と音楽との関わりをお聞かせください

日野原　大正7年、10歳で急性腎臓炎になり学校を休みました。そのとき「寝てばっかりは大変だから」と母に勧められて、ピアノを習い始めたのがきっかけです。京都大学時代にも結核で1年休学しました。寝たままじっとしているわけですから、レコードを聴いて楽譜に写すことを独学でやっていました。我流で作曲も始めて、ピアノ曲や歌曲も作りました。今は、ホスピスの患者さんのために、ボランティアの方たちに歌ってもらっています。私にとって、音楽はすごく大事なものなのです。

――ベー・チェチョルさんとの出会いは

日野原　声がぜんぜん出なくなったテノール歌手が、京都大学名誉教授・一色信彦先生の素晴らしい手術で回復してステージに立ちはじめたというので、2年前に名古屋でコンサートを聴いたのが最初です。感動して声にとりつかれました。

奇跡の歌声に心震えて

――この音楽会とトークショーをプロデュースされたきっかけですね

日野原　ええ、普通、甲状腺を手術して、横隔膜の神経をまひして、声が出なくなった人が歌手に復帰することはあり得ない。それが、奇跡的な手術で回復された。医学的にもそういうことがありうるのか興味津々でした。独唱を聴いて、もうどうしようもないほど心が震えて。もっともっと聴きたいと、思わず“アンコール！”を叫んでいました。以来、ベーさんの音楽会は、どこへでも行きたいという気持ちになりました。

――奇跡のテノールの映画ができて、韓国の釜山映画祭で特別上映されたとき、わきあがらっしゃいましたよね？

日野原　ええ、映画を見てえらく感動しましてね。それで直接、歌っている体にも触りたくてね。もう体に触って、手を握ってでもね、その体から伝わってくる振動を体感し、最高の音楽だと思いました。

――そこまで音楽と深く関わりがあったのに、芸術や音楽家になろうと思われたことはなかったのですか？

日野原　肺結核になったとき、広島のピアニストから「あなたね、日本に医者はたくさんいるから、アメリカに留学して音楽家になったら」って。家に帰ったら「とんでもない」といわれましてね。

――では、そのときに「行っといで」と言われていたら、われわれは103歳のピアノを聴けたかもしれなかった。人生って不思議です。

日野原　そう、いろいろなきっかけでいろいろなことが起こる。一色先生がいらっしゃらなければ、ベーさんの再起はなかった。この高齢(当時一色先生は77歳)で、声帯の手術をする人は世界に誰もいませんから。

――ところで、先生は「世界平和」は「愛」、「許すこと」だと、ずっとおっしゃっています

日野原　私は、子供に対して平和を教えたいのです。「いのちの授業」というのを10年以上前から続けています。いじめは許し合わないから起こるのです。いじめをなくす講演は外国も含めて、もう二百数十回やっています。

――先生は、戦争も何度か経験されています

日野原　結核をやったので徴兵検査は丙種でした。満州事変が起こったけれども、軍隊にとられなかったので、聖路加国際病院に就職しました。若い医者さんがみんな満州に行きました。いよいよ戦争がひどくなって、軍医を志願し海軍病院で4週間後に少尉になり、2、3日して終戦になりました。まあ、いろいろなことがありましたねえ、戦争中には。

――そして日本で初めての終末ケアのホスピス、生きることと死ぬことを見続けていらっしゃいます

日野原　命というものは目に見えない。小学生には、子供のうちは自分のために命を考えていい、一生懸命勉強して自分のために時間を使いなさい、君たちが大人になったとき、自分の時間を誰か人のために使いなさいっていうのです。子供は、命は時間であるということを分かってくれる。素晴らしいことだと思います。

――先生はご自分の時間をすべて世の中、人のために使っていらっしゃいます。ニコニコしながら。こんなにお元気なのはどうしてなのですか

日野原　生きがいを持っているからです。それがよく生きられるコツなのです。人が喜ぶ姿を栄養としてとり入れているのだと思います。

(4月21日、ザ・シンフォニーホールで。聞き手、輪嶋東太郎)

命は時間の中にある

ひのはら・しげあき　明治44年、山口県生まれ。京都帝国大学医学部卒。専門は心臓病学で日本初の人間ドックを開設するなど予防医学の普及に努める。聖路加国際病院名誉院長、医療秘書教育全国協議会会長ほか。文化勲章受章。著書多数。

ベー・チェチョル　昭和44年、韓国・大邱の出身。ヴェルディ音楽院修了。ヨーロッパの主要歌劇場で主役を演じるが、平成17年に甲状腺がんで声帯と右肺機能を失う。声帯機能回復手術を経て20年に歌手復帰した。

日野原重明プロデュース「奇跡の歌声に乗せて　第二弾」

トーク＆ベー・チェチョル演奏会

8月4日ザ・シンフォニーホールで

【日時】8月4日(火)　午後2時開演

【プログラム】

▷1部＝映画「ザ・テノール　真実の物語」上映

▷2部＝日野原重明スペシャルトーク「今、世界平和のために私たちが出来ること」、ベー・チェチョル(テノール)演奏会

〈曲目〉Amazing Grace、花にねむれ(オリジナル新曲)、愛のうた(日野原重明作詞・作曲)ほか

※ゲスト＝一色信彦氏(京都大学医学部名誉教授)

※司会＝輪嶋東太郎氏(音楽プロデューサー)

【会場】ザ・シンフォニーホール(大阪市北区)

【料金】全席指定　5500円

※未就学児の入場はお断りさせていただきます。

【チケットお申し込み】ザ・シンフォニー　チケットセンター(☎06・6453・2333)

【お問い合わせ】エス・ピー・エース　(☎06・6204・0412)

主催　ザ・シンフォニーホール、ヴォイス・ファクトリイ

協力　滋慶学園グループ、ソーシャルキャピタル・プロダクション、Global Wings

ベー・チェチョルさんの半生を描く映画

「ザ・テノール　真実の物語」上映

映画「ザ・テノール　真実の物語」から

(2014 BY MORE IN GROUP & SOCIAL CAPITAL PRODUCTIPN & VOICE FACTORY. ALLRIGHTS RESERVED)